明治学院大学
心理学部付属研究所通信

2018年3月
第10号

発行：2018年3月1日
明治学院大学 心理学部付属研究所
所長 花田 安弘
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL.03-5421-5445

ご挨拶

研究所年報の巻頭言でも触れましたが、目下心理学科では公認心理師への対応に取り組んでいるところです。昨年夏に必要なカリキュラムが公表され、それに対応するべく2018年度からのカリキュラムの変更を行います。2018年度入学生から資格取得に必要な科目を受講できるようになります。在学生や既卒の方については科目読み替えなどで対応できる部分とできない部分があり、資格取得の前提を満たすのは必ずしも簡単ではないようです。公認心理師の資格は国家資格ですので、今後取得者が増え広まっていくと思われますが、将来これまでの臨床心理士とどのように共存するのか、或いは臨床心理士資格取得者が減少し公認心理師資格に実質的に一本化されるようになるのか、今後の展開が注目されるところです。

教育発達学科は教職課程の再課程認定申請が、今年度の重要な現在進行中の重要な出来事です。無事申請が承認されることを願っておりますが、2023年度からは幼稚園課程での大幅な教員増が必要になるとのことで、それをどう実現していくか、今後の重要な検討課題になるようです。

研究所はこのような学科の対応の影響を受けつつ、学部生や院生の実習、心理臨床センターの活動、教員のプロジェクト研究活動などを行っております。これからも研究所活動へのご支援をどうぞ宜しくお願い致します。

心理学部長・心理学部付属研究所長 **花田 安弘**

調査・研究部門主任挨拶

2017年度も様々な研究活動が行われた。特別研究プロジェクトに関しては、昨年度から継続したものが2件と本年度研究を開始したものが1件であり、研究員の方々のご協力も得て着実に研究活動が進められている。学外の研究員の方々からの知見も得ることができるので、学内の教員だけではカバーすることができない領域にも広がり、大きな成果が期待できる。

今年度は海外の研究者との共同研究も行われた。心理学部付属研究所のグローバル化を図る一つのきっかけとなった研究である。国内・国外を問わず、研究所が果たすべき役割を念頭に置いて研究テーマを設定し、成果を積み重ねていくことが望まれる。

今後も時代に先駆ける研究、社会のニーズに応じた研究を積み重ねていくことが研究所所員に課せられた役割であると考えている。本通信をご覧になり、今後進めなくてはならないテーマについてご助言いただければ幸いである。

緒方 明子

相談・研究部門主任挨拶

2017年9月15日に、公認心理師法が施行され、2018年9月9日には第1回の国家試験が施行されることになりました。これまでも何度となく話題に上がっては消滅していた、心理領域での資格が、いよいよ国家資格化されることになりました。ただ実際の資格による運営は試験後になるため、海のものとも山のものとも分からないといったところが本音ではないでしょうか。

大学のカリキュラムの中にも、公認心理師養成プログラムが組み込まれたため、大学院及び学部の実習において、この心理臨床センターが大きな役割を担うことになりそうです。さしあたりは、臨床心理士と公認心理師の養成の両輪で行く予定なので、運営も複雑になるかもしれません。

またグローバル化の波が押し寄せている今日、地域貢献に向けて、当センターも多文化への要請に応えられるよう対応しなければならないと考えています。今後も皆さま方のご支援のもと、教育、社会貢献に向けて邁進していきます。

阿部 裕

調査・研究部門報告

2017年度 特別研究プロジェクト①

研究課題名

本研究所の地域貢献のあり方に関する探索的研究

研究代表者 **緒方 明子**（教授）

本研究プロジェクトは4つのテーマで構成されている。第1のテーマは「障害のある青年の余暇支援」である。2017年度は、就労している障害のある青年の余暇活動におけるサポートブックの有用性について検討することが目的であった。結果として、支援者と対象者がかかわりを持つための道具となること、短期間で対象者について知るために有用であることが示されている。

2番目のテーマは「社会性に困難のある児童・青年に対するコミュニティ参加支援」である。自閉症スペクトラム障害など社会性に困難のある児童、青年を対象に、他者とつながる成功経験を得られるよう配慮したグループ活動を実施し、参加できるコミュニティを得ることが彼らの社会参加をどのように支援するか検討した。児童グループを10回、青年期グループを4回実施した。地域の療育機関等の専門家5名の視察を受け入れ、こうしたコミュニティづくりを地域で展開するニーズ、課題、方法等について意見交換をした。

3番目のテーマは「通常の学級に在籍する児童生徒への学習支援」である。全般的な知的発達は平均値の範囲にありながら、通常の授業の中では学ぶことが難しい特異な困難さのある児童生徒を対象として、困難さの背景の検討と学習支援の方法について検討した。その結果、特定の内容を記憶することの問題、注意の問題が共通する困難さとして明らかとなり、各自の特性に合わせた記憶方法を開発し、継続的に指導することの必要性が示された。

4番目のテーマは「他施設との協働による精神障害者への支援」である。港区の「心のバリアフリー推進事業」と協働し、港区精神障害者地域活動支援センターで週に1度集団心理教育を行っており、参加者の生活の質や精神症状に改善が見られた。

2017年度 特別研究プロジェクト②

研究課題名

大学生における講義内容の記録と管理に関する心理・教育学的研究

研究代表者 **宮本 聡介**（教授）

大学生のノートテイキングの実態を明らかにすることが本研究の主たる目的であった。2017年度に実施した活動を構成員ごとにまとめると以下のようになる。

宮本：ノートテイキング研究の文献レビューとノートテイキングの実態調査を行った。実態調査では、小学校～大学までに作成したノートの保管の様子をweb調査を用いて明らかにしたり、講義ノートの記録の様子をデジタル画像としてアーカイブ化することを試みた。

辻：文科系の学生には、算数・数学は暗記科目というイメージが強い。では、問題解決行動の手段として数学を学ぶにはどうしたらよいかを、付箋の活用や具体例の書き込みの様子を観察し明らかにする。

佐藤：自身の講義資料を事例に、資料構成や授業進行の特徴が、学生のノートテイキングにどのように表出したのか、配付資料への書き込みや作成ノートに見られる共通点の抽出、及び学生へのアンケートを通じて考察した。

今後は、構成員それぞれのデータを整理し、研究論文としてまとめると同時に、各構成員の知見を統合し、ノートテイキングに対する態度、ノートテイキングの技術を、幼少期から成人までの時間軸上にそって整理することを試みたい。

2017年度 特別研究プロジェクト③

研究課題名

心理臨床センターにおけるグローバル化および内なる国際化に関する探索的研究

研究代表者 **阿部 裕**（教授）

2017年度は、16年度に引き続き、ネットワークのモデル地区として、群馬県伊勢崎市にあるNPO法人Jコミュニケーションと連携し、ネットワーク化を進めた。10月21日から1月中旬にかけて、合計7回の心理コーディネーター養成講座を開いた。実際の出張講義だけでなく、スカイプを用いた遠隔地講義も行ったがまずまずの出来であった。今後はこうした講義のアフターケアを考慮に入れた、継続的なネットワークを構築する必要があると考えられた。

また今年度は、NPO法人「CINGA」と協働し、外国人のこころの相談を行った。CINGAで外国人のこころの相談があったときだけ、研究員がCINGAへ赴き、スカイプで相談を受けた。実際の数は少なかったが、必要な時に外国人のこころの相談に応じられるネットワークシステムの構築として、今後も期待される。

さらに、11月11日に、特別プロジェクト企画として、第24回多文化間精神医学会（会場：明治学院大学）でラテンアメリカシンポジウムを行った。テーマは「第二世代の子どもにみられる発達の問題－教育、心理、医療の実践からみる現状と今後の課題－」であり、文科省、心理、精神医療、学校の領域から発表してもらい議論を深めた。第二世代の子どもたちの発達の問題については、今後も継続的に議論すべき課題であることが共有された。

萌芽研究プロジェクト

Psychosocial factors behind Climate Change human responses

As evidence supports the need and importance of cross cultural research, it becomes necessary that more studies are developed in both Japan and Portugal to evaluate psychosocial mechanisms behind its citizens behaviours regarding Climate Change and extrapolate the data to find common ground and differences.

The purpose of this research is to know how people living in Japan (JP) and Portugal (PT) are responding to Climate Change and compare both results to find ways to help people respond more effectively. The significance of this research is to contribute to the understanding of the psychosocial component of Climate Change because human responses to Climate Change are affected by cognitive, affective and motivational processes.

To collect the data, an online questionnaire was made which included a sociodemographic questionnaire and three scales – the CD-RISC, SOC and Impact of Event scale. A sample of 94 subjects was collected (47 from PT and 47 from JP) as a pre-test, during August 2017. Statistical analysis shows interesting differences between both samples, with PT exhibiting more adaptive and conscientious behaviours and higher levels of resilience and awareness compared to the JP sample.

Taking into account the pre-test results and subjects' feedback, we have decided to use the short version of the scales (maintaining validity and reliability) and shorten the sociodemographic questionnaire for the next phase of the research in which we will be collecting more data from both countries.

Right after collecting the pre-test sample, Portugal has been seriously affected by numerous wild fires which have killed and displaced many citizens all over the country (as a consequence of Climate Change). This has largely affected and changed people's perception of the issue and also impeded the access to the most affected areas which have been devastated. Due to the traumatic aspect of this situation, out next phase of research in Portugal has been postponed until more stable conditions arise. As such, we are now focused on adapting our questionnaire and scales to begin collecting the Japanese sample.

杉山 恵理子（教授）

萌芽研究プロジェクト

社会教育の役割と機能に関する基礎的研究

グローバル化、少子高齢化の進行等、社会が大きく変化するなかで、公民館や生涯学習センター等の社会教育施設を中心とする従来の社会教育の在り方が問われるようになってきた。本研究では、社会教育及び生涯学習に関する政策資料の分析、地方自治体の社会教育担当部局におけるインタビュー調査及び学習プログラムの分析を通して、今後の社会教育の役割と機能を検討し、大学、NPO、企業等の多様な主体との連携・協働、地域住民の学習支援を通した地域づくり等、今後の課題を提示した。またこうした変化に応じた社会教育専門職員養成のモデルを検討した。

渋谷 恵（教授）

研究助成プロジェクト

知的障害特別支援学校における校内巡回方式による発達精神科医療研修に関する研究

特別な教育的支援には、支援を必要としている子どもの障害の状態や心の健康状態を適切に把握することが不可欠である。本研究では、子どもの実態を把握する専門性を育成するため、知的障害特別支援学校の教員を対象に発達精神科医療研修を実施した。研修は、専門医が校内を巡回して教室での子どもの様子を担任教諭と共有した後、子どもの実態と支援について協議する形式で実施した。教員への調査を通じてその有用性と課題を検討する。

小林 潤一郎（教授）

研究助成プロジェクト

対人相互作用場面における感情共有の過程とその影響

個人間過程における感情の役割、特に人が受け手としてどのような場合にコミュニケーションを通じた感情共有を行うのかに関しては検討が十分なされていない。本研究では、送り手に対する受け手の感情共有を促進する要因として、送り手との結びつきの欲求を操作し、二者間のコミュニケーション過程におけるその働きを検討する。すでに実験刺激選定のための予備調査が終了しており、現在、本実験実施の準備を進めている。

田中 知恵（教授）

研究助成プロジェクト

北米の高齢者における心理的効果を促す回想の質的検討

本研究では「どのような回想が心理的効果をより促すのか」を明らかにすることを目的として、カナダのバンクーバー市に在住する地域在住高齢者17名（男性7名、女性10名、平均年齢76.4歳、SD6.1歳）に通訳同伴の上で60分×4セッションからなる個人回想面接を実施した。面接の音声記録から逐語記録を作成し、語りのテーマや構造、意味づけなどの「語りの特徴」を抽出し、回想による心理的効果との関連を検討した。

野村 信威（准教授）

研究助成プロジェクト

スクリプト及びそのフェイディング手続きによるASD児の会話的やりとりの促進

知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害のある幼児・児童にコミュニケーション行動やソーシャルスキルを指導する手続きとして、スクリプト及びスクリプトおよびスクリプトフェイディング(以下S・SF)手続きがあり、この指導手続きを研究対象とし、カード提示形式に加えタブレット提示形式のS・SF手続きの開発と改善、またクリニックベースの指導だけでなく学校現場でのケース研究を実施した。毎月1回、ケース研究会と臨床指導を行った。

宮﨑 眞（教授）

研究助成プロジェクト

小学生と中学生における音楽的音高の言語的符号化の能力に関する研究

音楽的音高の符号化の実態を調査している。絶対音感保有者が、一度身に付けた音名による音高の符号化を、移動や移調楽器の学習をすることによって、変容させることができるのかに焦点をあてて研究を進めている。また、その際、絶対音感の精度が劣化していくことがあるのかについても調査をしている。

水戸 博道（教授）

相談・研究部門報告（心理臨床センター）

2017年度は、例年通り順調なスタートを切りました。心理学部付属研究所相談・研究部門（心理臨床センター）では、アシスタントカウンセラーの新人2人を迎えました。また、公認心理師対応であると同時にセンター業務を補助してくれる助手も着任しました。心理臨床センターの中心的役割は、大学院生の臨床教育と、クライエントへのカウンセリングですが、それ以外にも、発達障害の子どもおよびその母親を支援するプログラムの実施、スタッフ研修、セミナー企画・運営などがあり、かなり充実した内容になっています。

来所するクライエントも、子どもから大人まで様々です。当センターの特徴は臨床部門と発達部門に分かれており、今年度も、一般的なこころの悩みや精神障害の人たちと自閉症スペクトラム障害、注意欠如多動障害、学習障害といった広義の発達障害の人たちを引き受け、支援しています。社会が複雑化してきたせいでしょうか、年々難しいクライエントが増えている気がします。

阿部 裕（教授）

● 2016年度心理臨床センター利用者数（延べ）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
初回面接	11	10	10	5	6	9	7	7	5	5	7		82
継続面接	117	123	147	141	109	147	151	158	163	170	162	189	1777
心理検査	4	6	3	6	1	4	7	2	1	4	4	7	49
PDDの子ども向けグループプログラム		2	10	10	5	5	10	3	7	9	3		64
親の会「ゆりの木」		7		8		8			7		7		37
余暇活動支援		7				5	5		6		8		31
合計	132	155	170	170	121	178	180	170	189	188	191	196	2040

● 2016年度新規受付ケース相談分類

	件数
学校・園生活	15
発達面	17
友人関係	
家族問題	18
暴力・暴言	
自己理解	15
職場問題	6
精神疾患	4
その他	3
不明	15
合計	93

公開セミナー報告・総評

2017年度 公開セミナー & シンポジウム

2017年10月28日（土）開催

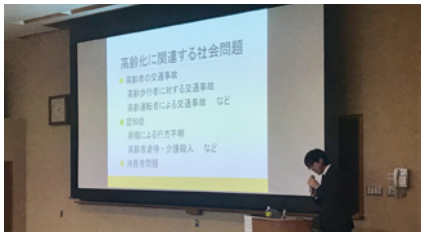
生涯発達から考える高齢者の認知機能
～記憶の失敗は高齢者だけではありません！～
金城 光（明治学院大学心理学部心理学科 教授）

高齢者の認知機能から考えるエイジング教育
松田 崇志（明治学院大学心理学部心理学科 助手）

認知症高齢者の心の理解と対応
森本 浩志（明治学院大学心理学部心理学科 准教授）

2017年度公開セミナーは「高齢者への心理支援」というテーマで10月28日に開催しました。心理学部の3名の教員により、生涯発達の視点から高齢者の認知機能を研究した知見（金城光教授）、高齢者の認知機能とエイジング教育の紹介（松田崇志助手）、そして認知症高齢者の心の理解と対応（森本浩志准教授）に関する講義が行われました。高齢者への心理支援について、基礎的な内容から認知症高齢者への対応に至る幅の広い内容で構成され、参加者の多様なニーズに応えることができたのではないかと考えています。高齢者への支援に携わる方々が参加しやすい日時、求めている情報についても今後検討し、さらに支援者のニーズに応えるためのテーマを追求していきたいです。

緒方 明子



明治学院大学心理臨床センター

あなたのこころを支えたい

学校、対人関係、性格、子育ての悩み…
お気軽にご相談ください。

※ホームページからご相談の予約はできません。お電話のみの受付となります。

予約電話 **03-5421-5444**
受付時間 月～土曜日 午前10時～午後6時
ホームページ http://psy.meijigakuin.ac.jp/clinic/